

# 漢字圏学習者の「の」の脱落における言語転移の様相：「の」「?」「的」の対応関係に着目して

著者	奥野 由紀子, 金 玄珠
雑誌名	国立国語研究所論集
号	2
ページ	77-89
発行年	2011-11
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000482">http://doi.org/10.15084/00000482</a>

## 漢字圏学習者の「の」の脱落における言語転移の様相

——「の」「의」「的」の対応関係に着目して——

奥野由紀子<sup>a</sup>      金   玄珠

<sup>a</sup>国立国語研究所 共同研究員, 横浜国立大学

### 要旨

本研究は「の」の脱落による誤用をターゲットとして言語転移の様相を探ろうとするものである。日本語学習者の名詞句における「の」の脱落は、複数の母語を対象とした作文及び発話データから、母語にかかわらず生じる誤用であることが明らかとなっているが、上のレベルになるにつれ漢字圏学習者により多く見られることが指摘されている。

そこで本研究では韓国語と中国語を母語とする上級日本語学習者に対して文法性判断テストによる調査を実施し、日本語と同様に修飾部と被修飾部をつなぐ働きをする「의 (韓国語)」「的 (中国語)」の有無が、日本語でも母語でも必要な「一致」か、日本語では必要であるが母語では不要な「不一致」か、母語ではあってもなくてもどちらでもよい「任意」かという観点から、「の」の脱落に対する正答率の差を検討した。その結果、中国語母語話者は、「一致」が「不一致」「任意」よりも有意に高く、母語との対応関係が一致しているほど正しく判断していることが明らかとなった。一方、韓国語母語話者は「任意」が「一致」「不一致」よりも有意に高く、母語との対応関係以外の要因が関与している可能性が示された。韓国語では「任意」であるケースが日本語と比較して非常に多く存在することから、韓国語で「任意」の場合には日本語では「の」が必要であるとする、学習者なりの認知的判断が関与している可能性が示された。従来の「正と負の転移」の枠組みでは説明しきれない言語転移のメカニズムの一端として報告する\*。

キーワード：「の」の脱落, 言語転移, 漢字圏学習者, 「の・의・的」, 文法性判断テスト

### 1. はじめに

第二言語習得過程における言語転移を取り巻く考え方は対照分析の時代以降、大きく変化してきている。誤用の原因は言語転移だとする対照分析の後、70年代の誤用分析の台頭により、言語転移では説明できない誤用が次々と明らかにされ、一方の生得主義的言語習得観の誕生から行動主義的言語習得観が批判されることによって、第二言語習得における言語転移は主要な要因とは見なされなくなった。しかし教育に携わる者の経験的見地からも言語転移の存在は明らかであり、正用も含めた学習者言語の実質的特性を説明しようとする中間言語研究が進むにつれ、実証的に明らかにされる様々な要因の一つとして言語転移も再認識されるようになった。今日では学習者は母語の知識を用いて外国語を習得することが明らかとされ、当初の表層レベルにおける言

\* 本研究は The Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7) において 2011 年 3 月 6 日サンフランシスコ州立大学で口頭発表したものを加筆修正したものである。また、本研究は平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「言語転移の双方向的検討—日本語の連体修飾構造の習得を中心に—」(課題番号 80361880 研究代表者：奥野由紀子) によるデータを使用したものである。本研究において羽瀨由子先生 (徳山大学) に統計分析と心理言語学的な知見に基づいたご助言によるご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

言語転移の研究から、話者の認知構造に関わる一層深いレベルでの言語転移に対して注意が向けられるようになり、多面的観点から新しく捉え直されている。しかしながら習得過程において言語転移がどのような場合にどの程度関与するのか、その様相については、未だ不明な点が多く、第二言語習得のメカニズムの解明において、実証研究を踏まえた言語転移の様相の究明が待たれている。

本研究では名詞句における「の」の脱落という現象を対象とし、日本語と名詞句構造がよく似ている、韓国語と中国語を母語とする日本語学習者に文法性判断テストを実施し、言語転移の様相について考察する。

## 2. 「の」の脱落に関する先行研究と本研究の仮説

日本語学習者には、「名詞+名詞」において「の」を使うべきところを、次のように「の」を脱落させてしまう誤用が見られる<sup>1</sup>。

- (1) \*練習ときはちょっと難しい。 (EIL04<sup>2</sup>)
- (2) \*私の妻が、今小学校で養護先生、あ、養護教師をしています。 (KA01)
- (3) \*つまり自分体力、続く限りですね。 (CS02)

このような日本語学習者の名詞句における「の」の脱落は、7ヶ国（中国・韓国・モンゴル・マレーシア・タイ・ベトナム・カンボジア）を対象とした日本語学習者の作文データ<sup>3</sup>（松田・森・金村・後藤 2006）によると、7ヶ国全てにみられるが、漢字・漢語圏の学習者は非漢字・漢語圏の学習者より名詞句生成が多く、学習者の名詞句の産出量は母語の影響を受けている可能性が高いことが指摘されている。また、1人当たりの複合名詞句の使用頻度が中国語話者は7ヶ国中最も多く、誤用の種類としては、「の」の脱落、漢語の使用ミスが多いことも同様に指摘されている。

奥野・金（2010）では、KY コーパスを用いて、韓国語と中国語、英語の学習者 90 名分の発話データにおける「の」の脱落の誤用を日本語のレベル別に抜き出した結果、初級では、韓国語、中国語母語話者には誤用がみられず、英語話者 2 名に脱落がみられ、中級、上級では韓国語、中国語、英語母語話者全てに誤用がみられることを報告している。これらの報告から、「の」の脱落による誤用は日本語学習者共通の誤用であるが、漢字圏、非漢字圏学習者では学習が進んだ中上級で誤用が多くみられる点が特徴的であると言える。

誤用が発生する要因として、奥野・金（2010）は、学習者特有の複合化や、置き換えといった、学習者のストラテジーが関与している可能性を指摘している。学習者特有の複合化とは、学習者

<sup>1</sup> 奥野・金（2010）にて抽出した KY コーパスからの「の」の脱落による誤用のデータである。

<sup>2</sup> KY コーパスの被験者の母語、レベル、番号を示す。E は英語母語話者、K は韓国語母語話者、C は中国語母語話者、I は中級、A は上級、S は超級を示す。中級は上・中・下に下位分類レベルがあり、EIL は English Intermediate Low（英語母語話者 中級 - 下）という意味となる。

<sup>3</sup> 「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対話データベース」（国立国語研究所）によるものである。学習時間やレベルの統一はなされていないが、writer's info によると学習時間が 300 時間以上で、600 時間程度の学習者が中心であるため中級以上であるとされる。

が「名詞+の+名詞」の名詞句を、「名詞+名詞」のように複合名詞化してよいと判断して誤ったと考えられる場合の要因を指す。例えば「\*日本語勉強」は、よくみられる誤用であるが、「日本語の勉強したいと思って」のように、会話中では、「の」や「を」が省略された形で使用されることが多い。このことから、「日本語の勉強」は非常に耳にする頻度が高い表現であるため、学習者は「日本語勉強」を使用可能な複合名詞のように認識してしまい、その結果、誤用の産出がおこると考える。

一方、置き換えのストラテジー<sup>4</sup>とは、例えば「食べたとき」「そのとき」「\*練習とき」のように「とき」を用いる際には、必ず「のマーカ+とき」でときの前にくる語を置き換えて使用するような方略を用いることである。それによって、「\*練習とき」「\*まえとき」「\*問題とき」のような誤用が起きると考える。

このような「の」の脱落による誤用は、上のレベルになるにつれ英語母語話者よりも韓国語母語話者や中国語母語話者で多くみられ、超級になっても漢字圏の母語話者には誤用が残ることから(奥野・金 2010)、漢字圏学習者の母語における名詞句の潜在的な知識が「の」の脱落に作用している可能性が考えられる。

金(2006)では「の」の脱落についての学習者の知識の一貫性を調べた。中上級の韓国人学習者を対象に「の」の脱落に関する即時的な文法性判断テスト・再テストを1週間の時間的間隔において2回実施し、回答の一致率が75% (正答の一致率66%, 誤答の一致率9%)であることを示した(推測が起る確率<sup>5</sup>を考慮すると50%)。学習者は母語話者(正答:90% 誤答:1%)と比較して一貫性は低いながらも、誤答に対しても何らかの判断基準を持っている可能性が伺え、この学習者独自の判断基準がなんであるのか探る必要が示された。

奥野・金・羽瀧(2010)では、韓国語母語話者を対象に、名詞句の修飾部と被修飾部における韓国語の「漢語」と日本語の和語にあたる「固有語」<sup>6</sup>の組み合わせを操作し、文法性判断テストを行った。その結果、母語における名詞句の語種の構成が「漢語+漢語」の誤用は、「漢語+固有語」、「固有語+漢語」の誤用よりも文法性判断課題の正答率が低いことが明らかとなり、韓国語母語話者の名詞修飾句における「の」の脱落には漢語複合語の潜在的な知識が影響していることが明らかになった。また、金(2006)の手法に基づき「の」と同様に修飾部と被修飾部をつなぐ働きをする「의」と「の」との対応関係を操作し、翻訳した際に「의」が必要(母語と日本語の構造が「一致」)／「의」があってもなくてもよい(母語と日本語の構造の一致度は「任意」による)

<sup>4</sup> 奥野・金(2010)の引用における金(2002)の用語による。

<sup>5</sup> Johnson 他(1996)によると学習者は目標言語に対する知識(自分が持っている知識)に当てはまるものであれば容認し、その基準に背くものであれば否定するといった基本的に2つのレスポンス(回答)・ストラテジーを用いると考えられ、自分が知っている文法に照らし合わせて考えても見当がつかない場合は、推測(guessing)に頼る傾向があり、この種のレスポンス・ストラテジーは、学習者にはみられるが、母語話者にはみられない特徴であると指摘している。また推測の算出方法は、2回とも正答のものをRR、2回とも誤答のものWW、正答から誤答に変わったものRW、誤答から正答に変わったものWRとした場合、RRとWWにおける実質的な一致率は、RWとWRにおける平均確率から推測できるとしている。

<sup>6</sup> 韓国語には日本語の和語にあたる韓国語特有の語がある。例えば、「엄마(母)」「크기(大きさ)」「낚시(釣り)」などがそれに当たる。

／「의」が不要（母語と日本語の構造が「不一致」）について文法性判断課題の正答率を比較した。その結果、「의」が任意である場合の正答率が、翻訳した際に「의」が必要な場合や「의」が不要な場合よりも高く、韓国語で「의」が任意である場合は、日本語では「の」が必要であることが多いという、学習者独自の判断基準が存在する可能性が示された。またそれは、韓国語には「의」があってもなくてもよいという「任意」のケースが非常に多く存在することが関与している可能性を指摘した。

本研究では、さらに中国語学習者を加えて漢字圏学習者の「の」の脱落における言語転移の様相を検討する。

日本語、韓国語、中国語は漢字圏であることから、多くの漢語語彙を共有している。しかし、日本語、韓国語には先述したように独自の語種（日本語には和語、韓国語には固有語）が存在する。もし、奥野・金・羽瀧（2010）で示されたように、漢語複合語の潜在的な知識が日本語名詞修飾語における「の」の脱落に影響しているのであれば、日本語や韓国語と比べて漢語を多く使用する中国語の母語話者は固有語を母語に持つ韓国語母語話者よりも「の」の脱落による誤用の判断において、得点が低いのではないだろうか。

また、中国語は、韓国語と比較して、「の」に相当する助詞「的」が必要か否かの判断が明確である（奥野・張・金 2008, 張 2009, 金・李 2010）。奥野・張・金（2008）では、日本語、中国語、韓国語を対照し、日本語で「の」が必須である「名詞+名詞」が、「の」に相当するものの有無によって（4）の3タイプに分かれることを示した。

- (4) a. 日本語「の」、中国語「的」を使い、韓国語「의」はどちらでもいいケース  
 b. 日本語では「の」を使い、中国語では「的」を使わず、韓国語ではどちらでもいいケース  
 c. 日本語では「の」を使い、中国語・韓国語では「的」「의」を使わないケース

そして修飾部と被修飾部の意味関係9カテゴリーのうち6カテゴリーがaとbの韓国語ではどちらでもいいケース「任意」に相当することを示している。

さらに、張（2009）では、日中を対照し、日本語で「の」が必須である「名詞+名詞」が、「の」に相当するものの有無によって（5）の3タイプに分かれることを示した。

- (5) a. 日本語では「の」を使い中国語でも「的」を使うケース  
 b. 日本語では「の」を使うが、中国語では「的」を使わないケース  
 c. 日本語では「の」を使うが、中国語では「的」を使っても使わなくてもよいケース

そして、奥野・張・金（2008）よりさらに詳しく分類された修飾部と被修飾部の意味関係13カテゴリーのうち、aは7カテゴリー、bは4カテゴリー、cは2カテゴリーのみであることを示している。つまり、韓国語の方が「任意」であるケースが多く、中国語の方が「的」が必要か否かが明確であると言えよう。もし「の」の脱落に「一致」「不一致」「任意」という母語での「の」に相当するものの有無が影響しているのであれば、中国語を母語とする日本語学習者の場合は、母語との対応関係がより明確に誤用判断の得点に反映されるのではないだろうか。

以下、仮説として2点挙げ、漢語複合語の潜在的な知識の影響と「の」の脱落における各母語に翻訳した際に修飾部と被修飾部をつなぐ働きをする「의 (韓国語)」「的 (中国語)」の有無を比較検討する。

仮説① 中国語母語話者は、韓国語母語話者に比べると、漢語複合語の影響で「の」の脱落が起きやすい。よって、文法性判断の正答率は中国語母語話者の方が韓国語母語話者よりも低くなるであろう。

仮説② 脱落の誤用判断は、中国語母語話者の方が韓国語母語話者よりも「の」に相当する「的」との対応関係をより明確に表している。よって「一致」が一番正答率が高く、「不一致」が一番正答率が低く、「任意」はその間の正答率となるであろう。

### 3. 「の」「의」「的」の対応比較と調査材料

#### 【「の」「의」「的」の対応比較】

日本語「の」と韓国語の「의」、中国語の「的」は、意味用法的にも大変よく似ている。名詞句生成の際、三言語ではともに同じ名詞後方型の語順をとり、体言による修飾の場合には「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」「N<sub>1</sub>의 N<sub>2</sub>」「N<sub>1</sub>的 N<sub>2</sub>」という修飾構造を取る点で一致している。しかしながら、韓国語や中国語では、そのような名詞句の修飾部と被修飾部の間の「의」「的」は日本語よりも省略される場合が多く存在し、特に韓国語においてはあってもなくてもよいという「任意」のケースが非常に多いというずれがある<sup>7</sup> (奥野・張・金 2008, 金・李 2010)。

本研究では、目標言語（日本語）では必ず「の」を必要とする場合に、母語（韓国語と中国語）でも同じく必ず「의・的」を必要とする場合と、母語では「의・的」があってもなくてもどちらでもいい場合、母語では「의・的」を用いない場合に分け、それぞれのカテゴリーを「一致」「任意」「不一致」と呼ぶことにする（表1参照）。そして「の」の脱落において母語の「의」「的」の有無が作用しているかを比較検討する。なお、「の」の脱落に関する検討であるため、日本語における複合名詞、及び名詞と名詞の間が「での」（アメリカでの生活）「からの」（東京タワーからの眺め）のような二重助詞であるものは対象外とする<sup>8</sup>。表1に、各言語における「の」「의」「的」の対応比較を示す。

<sup>7</sup> 金・李 (2010) では、現代韓国語コーパスの「2007年21C世宗計画現代原始マルムンチ」により「地名+N」計122例を分析し、「의」が使用されるケースを16に分類しているが、そのうち11ケースが任意であることを報告している。

<sup>8</sup> これらの用例は日本語を韓国語に訳した場合、「名詞+名詞」から「動詞+名詞」に統語構造が変るものが殆どであるため。

表1 「の」「의」「的」の対応比較

	日本語	韓国語	中国語
N <sub>1</sub> 의 / 的 N <sub>2</sub> L1 と (一致)	夜空の星	밤하늘의 별	夜空的星星
N <sub>1</sub> (의 / 的) N <sub>2</sub> L1 では (任意)	身体の具合	몸 (의) 상태	身体_狀況 / 身体的情况 <sup>9</sup>
N <sub>1</sub> _N <sub>2</sub> L1 と (不一致)	語学の實力	어학_실력	语言_實力

## 【調査材料】

今回の分析対象の調査材料としては、日本語では必ず「の」が必要な場合の名詞句 (N+N) において、母語と日本語との対応関係 (一致/任意/不一致) に基づく誤用が各カテゴリー 12 問ずつ合計 36 問、正用を各カテゴリーの誤用の半数<sup>10</sup> 6 問ずつ合計 18 問用意した (表 2 参照)<sup>11</sup>。文の漢字には全てルビがふられており、問題は 1 ページに 10 問ずつ記されていた。なお、調査の材料には「日本語勉強」「練習とき」のように使用頻度が高いことによる「学習者特有の複合化」や、「置き換えのストラテジー」による脱落の可能性のあるものは排除し、「私の父のかばん」のような 3 項以上のものは対象外とした (附録参照)。

表2 調査材料の例

	正用 (各 6 問 = 18 問)	誤用 (各 12 問 = 36 問)
L1 と (一致)	生産の 60%	* 夜空_星
L1 では (任意)	木の根	* 身体_具合
L1 と (不一致)	銀の指輪	* 語学_實力

## 4. 調査方法・被調査者

## 【調査方法】

音声を聞きながら判断する文法性判断テストを用いた<sup>12</sup>。これは「の」の脱落を含んだ名詞句や誤用を含まない名詞句を文の中で提示し、その名詞句部分の適切性を判断するテストであり、学習者の直感的な知識を測定しようとするものである<sup>13</sup>。調査の手順は以下の通りである。調査は教室内で一斉に行った。まず例を説明し、回答方法を把握させた。教示は全て口頭で、文を提

<sup>9</sup> 日本語で「身体<sub>1</sub>の<sub>2</sub>具合」の場合、韓国語では「体の状態」、中国語で「身体<sub>1</sub>の<sub>2</sub>狀況/情况」のように、「<sub>1</sub>具合」ではなく「<sub>1</sub>状態」「<sub>1</sub>狀況」や「<sub>1</sub>情况」になる。本研究では「の」に相当する「의」「的」が「一致」か「任意」か「不一致」かのカテゴリーに沿って日本語を各国語に翻訳し選定しているが、修飾部と被修飾部の語形を特に揃えることには固執していない。

<sup>10</sup> 誤用の判断に比べて正用の正答率が高いことは奥野 (2005)、金 (2006) などで確認済みであることと、学習者の負担を考え、数を減らした。

<sup>11</sup> 実際には本稿で分析対象外の「の」の過剰使用に関する問題やフィルターなどを含む全 152 問であった。

<sup>12</sup> 奥野 (2005) の手法に基づく。

<sup>13</sup> 産出レベルにおける「の」の脱落を調べるものではなく、学習者の受容レベルにおいて正しいと判断するかどうかを調べ、母語による受容基準の違いを比較し、誤用を産出する可能性の違いを検討するものである。また、本稿では扱わないが、この調査の後に空欄部に文字を入れた形式で、明示的知識を確認する、誤用訂正テストを行っている。

示しながら日本語で与え、被調査者は5問練習を行い、テープの音量や早さを確認した。問題文は自然なスピードで一度読み上げられ、それに沿って回答された。問題文の名詞句の部分が下線空欄になっており、その空欄部分の文法性が○×で判断された。漢字には全てルビをふった。

(正用例)

回答用紙：田中<sup>たなか</sup>くんは彼女<sup>かのじょ</sup>のために \_\_\_\_\_ <sup>か</sup>を買いました。( ○ )

音声：「田中くんは彼女のために銀の指輪を買いました。」

(誤用例)

回答用紙： \_\_\_\_\_ <sup>の</sup>がどうしても伸びず留学<sup>りゅうがく</sup>を諦<sup>あきら</sup>めた。( × )

音声：「語学実力がどうしても伸びず留学を諦めた。」

### 【被調査者】

被調査者は、韓国語母語話者 30 名、中国語母語話者 32 名であった。いずれも母国で日本語を専攻する大学生であった。SPOT ver.A (65 点満点) の得点に基づき、レベルの統制を行った結果、韓国語母語話者 30 名 (54 ~ 63 点)、中国語母語話者 17 名 (54 ~ 65 点) が分析の対象となった (韓国語母語話者の平均 59.9 点、中国語母語話者の平均点 58.4 点、 $t(45) = 1.66, n.s.$ )<sup>14</sup>。

## 5. 結果

正解に 1 点を与え、不正解及び無答には 0 点を与え、各品詞の満点を 5 点として平均値を算出した。誤用、正用各々に対して<sup>15</sup>、各条件の平均得点を図 1、図 2 に示す。

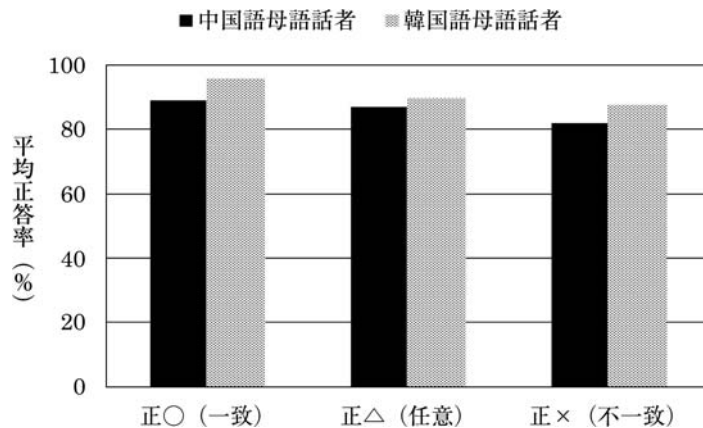


図 1 正用の各条件における平均正答率 (%)

<sup>14</sup> 岩崎 (2002) では、英語母語話者の SPOT ver.B の得点と公式 ACTFL OPI の査定の間に高い相関関係 ( $r = 0.81, p < 0.01$ ) が示され、50 点以上のものは OPI の中級の中以上であったと報告しているが、韓国語母語話者を対象とした金 (2006) では SPOT ver.B より難易度の高い SPOT ver.A と ACTFL OPI の査定においても同じ傾向が示された。本研究の対象者は平均が SPOT ver.A 58 以上であることから、OPI の上級前後のレベルであると考えられる。

<sup>15</sup> 文法性判断テストで正用を正用と判断することと、誤用を誤用と判断する能力は、同質とは言えないため、正用と誤用は分けて分析を行った。



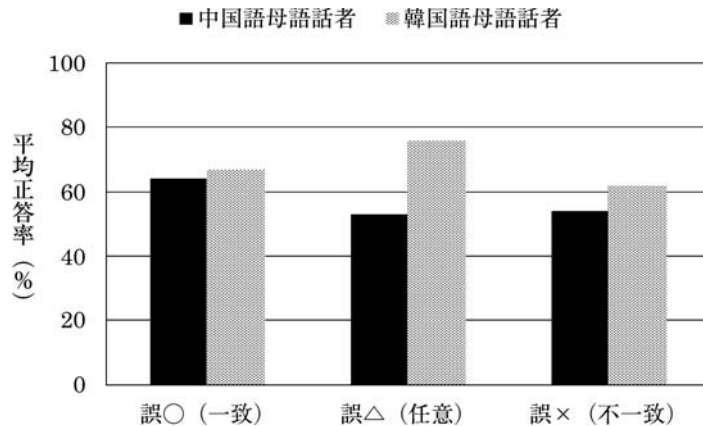


図2 誤用の各条件における平均正答率 (%)

### 【正用判断】

分散分析を行った結果、中国語母語話者と韓国語母語話者の得点はいずれも80%以上と高く、学習者間で有意な得点差はみられなかった [ $F(1, 45) = 2.44, n.s.$ ]。母語と日本語との名詞修飾構造の対応関係には有意差がみられたので [ $F(2, 90) = 6.08, p < .001$ ]、多重比較を行った結果、対応関係が「一致」している名詞句は、対応関係が「任意」、あるいは「不一致」の場合よりも文法性判断の得点が高いことが示された。交互作用は有意ではなかった [ $F(2, 90) = .48, n.s.$ ]。つまり、正しいものを正しいと判断する正用の判断においては、中国語、韓国語という母語にかかわらず正答率が高く、「一致」よりも、「不一致」の判断が難しい結果が示された。

### 【誤用判断】

正用判断と同様に各条件の得点について2要因の分散分析を行った。その結果、学習者間で得点に傾向差がみられ、韓国語母語話者の方が中国語母語話者よりも得点が高い傾向が示された [ $F(1, 45) = 3.19, p < .10$ ]。母語と日本語との名詞修飾構造の対応関係では有意差があり [ $F(2, 90) = 6.64, p < .001$ ]、多重比較を行った結果、対応関係が一致あるいは任意の誤用は、不一致の誤用よりも文法性判断の得点が高いことが示された。さらに、交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った。その結果、母語に翻訳すると「의」「的」が「任意」となる誤用の文法性判断に母語話者間で有意差があることが示された。また、中国語母語話者は「一致」の得点が、「任意」あるいは、「不一致」よりも高かった。一方、韓国語母語話者では、韓国語で「任意」が、「一致」や「不一致」よりも文法性判断の得点が高いことが示された。つまり、中国語母語話者の正答率が韓国語母語話者より有意に低く、中国語母語話者は目標言語である日本語と母語が一致している場合の正答率が有意に高いが、韓国語母語話者は「任意」である場合が最も高く、母語によって判断傾向が異なることが示された。

表3 母語と正用・誤用判断ごとの結果まとめ

	正用判断の場合	誤用判断の場合
韓国語母語話者	一致 > 不一致・任意	任意 > 一致・不一致
中国語母語話者	一致 > 不一致・任意	一致 > 不一致・任意

## 6. 考察

以上の結果に基づき、2.に示した仮説について考察する。

仮説① 中国語母語話者は、韓国語母語話者に比べると、漢語複合語の影響で「の」の脱落が起きやすい。よって、文法性判断の正答率は中国語母語話者の方が韓国語母語話者よりも低くなるであろう。

仮説② 脱落の誤用判断は、中国語母語話者の方が韓国語母語話者よりも「の」に相当する「的」との対応関係をより明確に表している。よって「一致」が一番正答率が高く、「不一致」が一番正答率が低く、「任意」はその間の正答率となるであろう。

正用の判断は両学習者とも高い正答率で、母語による差がみられず、正用判断は学習者にとって容易であったと言える。また、母語にかかわらず「一致」が高く「不一致」が低いのは、対照分析に基づいた結果であると言えよう。

しかしながら誤用の判断では正答率に基づく難易度に母語による違いがみられた。まず、中国語母語話者は全体的に韓国語母語話者よりも低い傾向が見られた。つまりこれは「漢語+漢語」で構成される中国語の漢語複合語に関する知識が影響されるという考えに基づく仮説①の可能性を支持するものである。しかし今回、有意差ではなく、傾向差であったため今後被調査者を増やすなどしてさらに検討する必要がある<sup>16</sup>。

次に、中国語母語話者は「一致」が「任意」や「不一致」よりも有意に高く、母語との対応関係が一致しているほど誤用を誤用であると正しく判断していることから、「の」に相当する「的」が必要か否かを基準に文法性を判断していることがわかる。これは仮説②を支持するものである。韓国語母語話者は奥野・金・羽渕（2010）でも指摘したように「任意」の正答率が「一致」や「不一致」に比べて有意に高く、文法性判断に際して、今回操作しなかった要因が関与している可能性が示された。その可能性としては、奥野・張・金（2008）における日・中・韓の比較や、金・李（2010）の韓国語のコーパスの分析結果からも示されているように、韓国語の「의」はどちらでもいいケース「任意」の場合が非常に多いことが作用していると考えられる。つまり、名詞句形成において日本語では「の」を挿入するのが標準とされるが、韓国語の場合は「의」が任意的に使用されるケースが非常に多いことから、韓国語母語話者は「韓国語で「의」が省略可能な場合、日本語では「の」を入れた方が正答率が高くなる。」とする母語と日本語との差に基づいた

<sup>16</sup> 本稿では、中国語母語話者と韓国語母語話者のレベルを合わせるために中国語母語話者の対象者を限定したため、韓国語母語話者と比較し中国語母語話者が少なかった。

回答方略を用いているのではないだろうか<sup>17</sup>。逆に「一致」「不一致」には差がなく「任意」と比較して有意に正答率が低かった理由としては、韓国語学習者は明確に「一致」「不一致」を意識していないことを示していると考えられる。つまり、韓国語学習者は、誤用判断において「迷ったら×（「の」が必要）」と判断したのではないだろうか。

中国語母語話者の場合は、中国語では韓国語と異なり、「任意」のケースはかなり限定されている<sup>18</sup>ため韓国語母語話者のような回答ストラテジーは働かず、「的」が必要か否かという母語の基準に基づいて判断していることが伺える。

以上の考察から、「の」の脱落に母語に翻訳した際の「の」に相当する語「의・的」の有無が影響しているのであれば、中国語を母語とする日本語学習者の場合は、母語との対応関係がより明確に得点に反映されるであろうという仮説②が支持されたと言える。すなわち、同じ漢字圏学習者であっても、中国語母語話者は、「の」に相当する「的」が必要か否かを基準にして名詞句の文法性判断を行っており、母語との対応関係が一致しているほど正しく誤用判断をおこなえることが示された。一方、韓国語母語話者では、対応関係が「의」の有無というよりも、「의」が任意（母語と日本語の構造が部分一致）の場合が一つの基準となって文法性判断がおこなわれていると考えられた。それは、母語に「任意」のケースが非常に多いことが要因であると考えられる。

以上の結果から、漢字圏学習者の中でも、文法性判断を行う際の判断基準が母語によって異なっていることがわかる。学習者は母語と目標言語の間の差異などの知識や経験から構築された独自の基準に基づいて文法性の判断をしていると言えよう。このことは、従来の「正の転移」「負の転移」という言語転移の枠組みのみからでは説明できない新たな様相であると言える。

## 7. まとめと今後の課題

本研究では漢字圏学習者である韓国語母国話者と中国語母国話者に対して、「の」の脱落に焦点を当てて、文法性判断テストを実施した結果、「の」の脱落における言語転移の様相として、母語の漢語複合語に関する知識が影響している可能性を指摘した。また、「の」と「的」「의」の「一致」「任意」「不一致」から分析した結果、中国語母語話者の誤用判断では母語との一致度によって正答率が高くなる結果が示された。しかしながら、韓国語母語話者の誤用判断では「任意」の場合の正答率が高いことから、母語の知識を利用した学習者の回答方略などが関与している可能性を指摘した。今後、韓国語母語話者の「任意」の正答率が高い理由について、学習者が独自に構築している基準はどういったものなのか、さらに検討をすすめる必要がある。

また、今回は言語転移の様相として「の・의・的」の対応関係に焦点を当てて分析を行ったが、修飾部が被修飾部の素材（銀の指輪）や、修飾部が被修飾部の所有者（鈴木君のかばん）の場合

<sup>17</sup> 韓国語母語話者へのフォローアップインタビューより「『의』をいれても自然なので『の』も大丈夫だと思った」という声が聞かれた。今回は即時的な判断によるものであるため、メタ言語的な証言をそのまま裏付けることには慎重になる必要があるが、母語を利用した回答方略が使用されている可能性を示唆するものであると思われる。

<sup>18</sup> 調査項目を選定する際にも中国語では任意を抽出するのが非常に困難であった。

というような、修飾部と被修飾部の意味的組み合わせからの検討も行っていく必要がある。

## 参 照 文 献

- 張麟声 (2009) 「名詞にかかる連語的修飾構造の日中対照研究—「の」と“的”の使用の有無を中心に—」『言語文化研究』(言語情報編) 4: 22-36. 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科.
- 岩崎典子 (2002) 「日本語能力簡易試験 (SPOT) の得点と ACTFL 口頭能力測定 (OPI) のレベルの関係について」『日本語教育』 114: 100-105.
- Johnson, Jacqueline S., Kenneth D. Shenkman, Elissa L. Newport and Douglas L. Medin (1996) Indeterminacy in the grammar of adult language learners. *Journal of Memory and Language* 35: 335-352.
- 金玄珠 (2002) 「韓国語母語話者はどのような時に「ノ」の誤用を産出するか—「ノ」の脱落と被修飾語との関わりを中心に—」『学校教育学論集』 5: 109-116.
- 金玄珠 (2006) 『韓国人日本語学習者の連体格助詞使用上の不確定性に関する実証的研究』東京: 雄松堂出版.
- 金玄珠・李叔宜 (2010) 「名詞句における『の』と『의』の日・韓対照研究—コーパスを用いた『地名 + N』の意味分類を中心に—」『留学生センター教育研究論集』 17: 27-44.
- 松田真希子・森篤嗣・金村久美・後藤寛樹 (2006) 「日本語学習者の名詞句の誤用と言語転移—アジア7カ国による日本語作文データに基づく分析—」『留学生教育』 11: 45-53.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究』東京: 風間書房.
- 奥野由紀子・張麟声・金玄珠 (2008) 「名詞にかかる修飾構造の日中韓対照研究—〈の〉〈的〉〈의〉の使用の有無を中心に—」『日本語教育学世界大会予稿集』 2: 57-65.
- 奥野由紀子・金玄珠 (2010) 「日本語学習者の『の』の脱落に関する一考察—横断的発話資料に基づいて—」『留学生センター教育研究論集』 17: 45-63.
- 奥野由紀子・金玄珠・羽瀨由子 (2010) 「韓国人学習者の名詞句に関する文法性判断の特徴: 「の」の脱落を中心に」『韓国日語日文学会 2010 年度冬季国際学術大会発表論文集』 226-230.

## 附 録

韓国語・中国語母語話者用，文法性判断調査文例

カテゴリ		日本語	韓国語	中国語
一致	誤用判断	*その事件鍵は私が握っています。	사건의 열쇠	事情的关键
		* <sup>よぞらはし</sup> 夜空星はたくさんの星座に分けられます。	밤하늘의 별	夜空的星星
		*釣り楽しさを教えてくれたのは、父です。	낚시의 즐거움	钓鱼的快乐
	正用判断	生産の60%を輸出しています。	생산의 60%	产量的百分之六十
		科学は人類の未来に大いに貢献している。	인류의 미래	人类的未来
		その選手の記録に世界が驚きました。	선수의 기록	选手的纪录
任意	誤用判断	*体具合はいかがですか。	몸 상태 / 몸의 상태	身体状况 / 身体的情况
		?友だちが出産したので、赤ちゃん靴下を、プレゼントした。	아기 양말 / 아기의 양말	小孩儿袜子 / 小孩儿的袜子
		*建物大きさが土地に占める割合は法律で決められています。	건물 크기 / 건물의 크기	建筑面积 / 筑物的面积
	正用判断	ショパンはポーランドの音楽家である。	폴란드 음악가 / 폴란드의 음악가	波兰音乐家 / 波兰的音乐家
		木の根が腐っています。	나무 뿌리 / 나무의 뿌리	树根 / 树的根子
		学生の身分でそんなにお酒を飲んではいけません。	학생 신분 / 학생의 신분	学生身份 / 学生的身份
不一致	誤用判断	*語学実力がどうしても伸びず留学を諦めた。	어학 실력	语言实力
		*私は、母にもらった金ネックレスを大切にしています。	금목걸이	金项链儿
		*ソウル人は年に平均 2,312 時間働いています。	서울 사람	首尔人
	正用判断	田中君は彼女のために銀の指輪を買いました。	은 반지	银戒指
		スイスの時計は販売率が年々増加しています。	스위스 시계	瑞士手表
		夏休みの間に復習をします。	여름방학 동안	暑假期间

## Linguistic Aspects of Language Transfer in Omission Errors of the Japanese Particle *no* (の): Focusing on the Relationships between *no* (の), *ui* (으), and *de* (的)

OKUNO Yukiko<sup>a</sup>

KIM Hyonju

<sup>a</sup>Project Collaborator, National Institute for Japanese Language and Linguistics  
Yokohama National University

### Abstract

This study investigated linguistic aspects of language transfer, focusing on the erroneous omission of the Japanese particle *no* (の). Grammaticality judgments of Japanese examples with *no* omitted were elicited from advanced-level Japanese learners whose L1 is Korean or Chinese. Three categories were used: (a) MATCHING – The *no* particle in L2 Japanese and the *ui* (으) particle in L1 Korean or *de* (的) particle in L1 Chinese are required. (b) NON-MATCHING – The *no* is required in L2, but the *ui* or *de* is not normally used in L1. (c) OPTIONAL – The L2 particle is required, but the L1 particle is optional. The results show that L1 Chinese learners had a significantly higher rate of correct responses to MATCHING items than to NON-MATCHING or OPTIONAL items, which suggests that learners judge more accurately when the correspondence between L1 and L2 is better. On the other hand, the L1 Korean learners did significantly better on OPTIONAL items than on MATCHING or NON-MATCHING items, which suggests that factors other than the correspondence between L1 and L2 may be involved.

**Key words:** omission errors of the particle *no* (の), language transfer, Korean learners, Chinese learners, grammatical judgments